京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **39** (2020), 137–148

アタヤル語群の「上り」と「下り」の起源

落合　いずみ

【要旨】セデック語パラン方言（オーストロネシア語族アタヤル語群）の「下り」には *rahuts* と *hunats* という二つの形式が見られる。それぞれをセデック祖語に再建すると*rahut と*hunat になるが，*rahut の方は「海手」を表すオーストロネシア祖語*lahud の反映形である。もう一つの*hunat について，本稿は*rahut に対し，化石後方接中辞の<*na*>が挿入された形式ではないかと提案する。アタヤル語群には機能の不明な接尾辞・接中辞が見られるという特徴があり，これらを化石接辞と呼ぶ。その中でも語末子音の直前に挿入され CV という音節構造を持った接中辞を後方接中辞と呼ぶ。つまり*rahud（アタヤル語群祖語の形式）→ *rahu<na>t → *hu<na>t という音韻的変化が起きたと推察される。セデック語に起きたと考えられるこの変化と類似の変化がアタヤル語の「下り」にも起きた可能性がある。アタヤル語の「下り」には *yahuʔ* と *hugal* があり，*yahuʔ* はオーストロネシア祖語の反映形である。もう一つの *hugal* は後方接中辞<*ga*>が挿入されていると推察される（*rahud → *rahu<ga>d → *hu<ga>l*）。反対語の「上り」においても，アタヤル語では *raya* と *yatux* という二つの形式が見られ，*raya* は「山手」を表すオーストロネシア祖語*daya の反映形だが，*yatux* は *raya* に対して，化石接尾辞-*tux* が付加したと推察される（*raya → *raya-tux → *ya-tux*）。*

【キーワード】化石接辞，アタヤル語，セデック語，*daya，*lahud

1　はじめに

本稿はオーストロネシア語族のアタヤル語群を扱う。アタヤル語群は台湾先住民族によって話される言語である。アタヤル語群にはアタヤル語とセデック語の二つの言語が含まれる。アタヤル語には Squliq（スコレック）方言と C'uli'（ツオレ）方言の二方言，セデック語には Paran（パラン）方言と Truku（トゥルク）方言の二方言がある[1]。

アタヤル語群における「上り」と「下り」には，オーストロネシア祖語の「山手」と「海手」の形式を反映するものが見られるが、台湾の山深い地域に暮らしてきたアタヤ

* 本稿は北海道言語研究会第 19 回例会（2020 年 3 月 26 日，室蘭工業大学）における研究発表に基づく。助言をくださった方々に感謝する。但し本稿の不備は執筆者の責任である。

[1] この方言の分類は小川・浅井（1935: 21，559）に基づく。また，本稿におけるセデック語パラン方言のデータについて，特に引用の情報が無い場合は執筆者のフィールド調査による。

ル族とセデック族では，本来「山手」「海手」を意味していた語は「上り（坂）」「下り（坂）」に意味が変わっている。

セデック語パラン方言の「下り」は，落合（2016b: 29）によれば，*hunats* であり，これから派生した語である *tugu-hunats* には，交替する語 *tugu-rahuts* が見られるという[2]。これらの派生語に付加している *tugu-* は方向を表す接頭辞である（落合 2016a: 173–175）。この接頭辞を除いた語根，*hunats*「下り」と同じ意味を表すと考えられるのが *rahuts* である。ただ，この *rahuts* は接辞の付いた形式しか見られず，語根のみでは現れない。ちなみに，セデック語トゥルク方言ではパラン方言の *hunats* に対応する形式として Rakaw 他編（2006: 317）に *hunat* が見られたが，パラン方言の *rahuts* に対応する語は管見の限り先行研究には見られなかった。パラン方言の *hunats* とトゥルク方言の *hunat* を比べると，語末の子音が異なる。1920 年代のパラン方言の資料である Asai（1953）において，語末には子音 *t* のみが見られ，これが現代のパラン方言では *ts* に変わっていることを考慮し，セデック祖語の形式として語末に *t* を建てるとすると，*hunat となる。パラン方言に見られるもうひとつの形式も語末が *ts* であるため，同様の変化が想定され，セデック祖語では*rahut と建てられる[3]。

落合（2016b: 29–30）が指摘するように，パラン方言の *rahuts* は，「海手」を意味するオーストロネシア祖語*lahud の反映形である。この形式は歴史的変化にも符合する。語頭の*l から *r* への変化について，オーストロネシア祖語の*l はアタヤル語群において*r になり，セデック語において *r* になることが知られている（Li 1981: 275）。また語末の*d から *ts* への変化についても，オーストロネシア祖語の語末*d はセデック語パラン方言において *ts* になることが知られている（Li 1981: 254）。

落合（2016b: 30）は，語根 *rahuts* からの音位転換と子音の突発的変化により *hunats* が生じたと分析している。つまり，第一音節の *ra* と第二音節のコーダを除いた *hu* が音位転換を起こし，*rahuts* は *hurats* となり，さらに，語中の子音 *r* が *n* へ変わって *hunats* になったと言っている。

ただこの音韻的変化には不自然な点がある。管見の限り，セデック語において，CV

[2] セデック語パラン方言の音素体系は母音が/a e i u o/（二重母音は/uy/の一種類），子音が/p b t d ʦ k g q s x h m n ŋ l r w y/である（*r* は/ɾ/に，*y* は/j/に相当する）。月田 (2009: 56–62）によるとトゥルク方言の母音は単母音が/a i u ə/，二重母音が/aw ay uy/であり，子音は /ʦ/が無い以外はパラン方言と同じである。 また，月田によるとトゥルク方言において *l* は [ɮ], *g* は [ɣ] に相当する。

[3] 但し，オーストロネシア祖語の語末*d がセデック祖語でどう反映されるかは検討の余地が残されている。本稿では語末*t で反映されるとしたが，語末*ts で再建される可能性も残されている。というのも，帝国学士院編（1941）における早期のトゥルク方言の形式では語末に *ts* が現れているからである。もしセデック祖語として語末が*ts と再建されるならばパラン方言では ts から *t* になりさらに *ts* に戻るという変化が起きたことになり，トゥルク方言では *ts* から *t* になる変化が起きたことになる。

という音節構造を持っているもの同士が音位転換を起こした例は見られない[4]。また，語中の *r* が *n* に変わる変化も見られない[5]。そこで本稿は，別の音韻的変化の可能性を探ってみる。それは，本稿が「化石接辞」と呼ぶ特殊な接辞の付加である。

この特殊な接辞は Li（1985）で述べられているように，オーストロネシア語族に属する言語の中でも，アタヤル語群に特徴的に見られるものである。例えば，オーストロネシア祖語における「顔」は*daqiS であるが（Blust and Trussel 2010），Li（1985: 258）はアタヤル語群祖語において*<*ra*>または*<*na*>と再建される接中辞が付加されているとする。アタヤル語スコレック方言における「顔」の形式は *rəqi*<*ya*>*s* であり，セデック語トゥルク方言では *dəqə*<*ra*>*s* である。アタヤル語スコレック方言では，アタヤル語群祖語の*r が *y* に変わるので（Li 1981: 264），この接中辞は*<ra>に遡るとする。一方，アタヤル語ツオレ方言のシキクン下位方言（Skikun）では，「顔」の形式が *rəqi*<*na*>*s* であることから，Li はアタヤル語群祖語に*<na>も再建している。これらの語に見られたような，語末子音の直前に挿入され CV という音節構造を持った化石接中辞を Ochiai（2018a）は「後方」接中辞と呼んだ。

本稿が提案するのは，セデック語パラン方言の *hunats*「下り」は，オーストロネシア祖語を反映した形式である *rahuts* に対し，化石後方接中辞が挿入された可能性があるということである。つまり，セデック祖語**rahut* に化石後方接中辞の<*na*>が挿入されて *rahu*<*na*>*t* という形式が一旦作られ，そこから第一音節が脱落して *hu*<*na*>*t* となり，さらに語末子音が変化して *hu*<*na*>*ts* になった可能性がある。実際，<*na*>という形式の化石後方接中辞は上記のように Li（1985）もアタヤル語群祖語に再建している。

中間形式として挙げた *rahu*<*na*>*t* から前次末音節の *ra* が脱落することについて，母音弱化との関連事項を述べる。小川・浅井（1935: 22，560）で述べられるように，アタヤル語群においては，強勢の置かれる次末音節より前の音節は母音が弱化するという音韻的変化がある[6]。そのため，接中辞の挿入により前次末音節に移動し，強勢の置かれなくなった音節 *ra* において，母音は一旦弱化し，曖昧母音 *rə* に変わったはずである。

もし現代において***rəhu*<*na*>*ts* という形式が残っていたなら[7]，接中辞が挿入され

[4] 月田（2009: 76–78）が提示したトゥルク方言における音位転換の例では，子音のみが交替している。

[5] ただし歴史的に見ると，Ochiai（2018b: 134）が述べたように，セデック語パラン方言の語末 *r* は現代では *n* に変わっている。

[6] 但し，アタヤル語について小川・浅井（1935: 22）の説明を正確に述べると，次末音節にアクセントが置かれるのは，次末音節に曖昧母音がある場合と語末音節に長母音または語末音節のコーダに声門閉鎖音がある場合を除く。それらの場合には，語末音節にアクセントが置かれるとする。

[7] 二重のアステリスクはこの形式が存在しないことを示す。

た証拠になる。ただこのような形式は見られないため，接中辞が挿入された証拠は不十分である。それでも，アタヤル語群の特徴とされる化石接辞の付加という音韻的変化で説明している点では，セデック語に見られない音位転換で説明するよりも妥当であろう。化石接辞付加の仮説は実証性に乏しく憶測の域を出ないと思われるかもしれないが，本稿は化石接辞の付加の可能性を提示することで，今後の研究の布石としたい。

2 節は，セデック語の「下り」に対するアタヤル語の同源語を紹介し，アタヤル語もセデック語と同様に，祖語を反映した形式と化石接中辞が付加された可能性のある形式の両方が見られることを述べる。3 節は，反対語にあたる「上り」についてもアタヤル語に二つの形式が見られることを紹介し，一つはオーストロネシア祖語の反映形であり，もう一つは化石接尾辞が付加された可能性があることを述べる。4 節ではセデック語とアタヤル語の「上り」と「下り」についてまとめ，アタヤル語群祖語を再建する。

2　アタヤル語の「下り」

表 1 にあるように，アタヤル語スコレック方言の語彙集（小川 1931: 87）には「下流」を表す語が二種類見られる。共通部分の *na* は連結辞（黄 2000: 58–59）で，*ləliuŋ* は「川」を表す語である。太字で示した語 *yahuʔ* と *hugal* が「下り」を示している。

表 1　アタヤル語スコレック方言における二種類の下流

yahuʔ *na ləliuŋ*	***hugal*** *na ləliuŋ*

二種類の形式のうち，*yahuʔ* は小川（1932: 4–5），Tsuchida（1975: 181）にオーストロネシア諸語から同源形式が挙げられており，Blust and Trussel（2010）ではオーストロネシア祖語に*lahud と再建している。1 節でも述べたように Li（1981: 264）によると，オーストロネシア祖語の*l はアタヤル語群祖語で*r になり，アタヤル語ではさらに *y* になる。語末の子音が*d から *ʔ* に変わっていることについては，Li（1981: 254–255）によると，オーストロネシア祖語の語末*d は，アタヤル語スコレック方言では *ʔ* に変わるとする。

1 節ではセデック語の「下り」について，*hunat という形式は，祖語を反映した*rahut という形式に化石後方接中辞の<*na*>が挿入されて作られた可能性があると述べた。その化石後方接中辞の挿入という変化が，アタヤル語スコレック方言の *hugal*「下り」においても同様に起きた可能性を考えてみる。

アタヤル語の場合，オーストロネシア祖語*lahud「海手」に対し化石後方接中辞の

*<ga>*が挿入したのではないだろうか。変化の流れは以下のように推測される：*lahud → *rahud*（語頭子音*l の *r* への変化）→ *rahu<ga>d*（化石後方接中辞*<ga>*の挿入）→ *yahu<ga>d*（語頭子音 *r* の *y* への変化）→ *yahu<ga>l*（語末 *d* の突発的な *l* への変化）→ *hu<ga>l*（前次末音節の脱落）[8]。この一連の変化の中でひとつだけ歴史的音変化に符合しないものがある。それが語末*d の *l* への変化である。Li（1981: 254–255）で述べられているように，語末*d はアタヤル語スコレック方言では *ʔ* になるため，この語においても *hugaʔ* が期待されるが，実際の語末は *l* で現れる。これは*d から *l* への突発的な変化が起きたためだろう。少なくとも調音点は同一である。

ここまで，アタヤル語スコレック方言にはオーストロネシア祖語*lahud を反映する形式である *yahuʔ* と化石後方接中辞の挿入された形式である *hugal* の二つがあるということを述べた。原住民族委員会（2013）では，アタヤル語ツオレ方言のパルガワン下位方言として *yahu*「下」と，同じくツオレ方言のメカラン下位方言として *kyahu*「下」が見られた。メカラン下位方言の「下」の形式には接頭辞の *k-* が付いていると考えられる。これら二つの形式を比べると，ツオレ方言の語根は *yahu* となる。これらの形式に語末子音は見られなかったが，Li（1981: 254–255）のアタヤル語ツオレ方言のデータにおいて，オーストロネシア祖語の語末*d は *ʔ*，*t* または *ts* で現れている。そのため，「下」を表すこれら二つのツオレ方言の形式に見られるように語末子音が脱落しているのは特殊である。もしくは声門閉鎖音として現れているにもかかわらず先行研究では声門閉鎖音を表記していない可能性もある。

次に，ツオレ方言で「下」を表す形式として，Ferrell（1969: 376）に *hugal* が挙げられていた。小川・浅井（1935: 付録 16）でも，ツオレ方言（竹東付近にあったとされるタコナン集落）に *hugan* という形式が見られ，「北」を表すとされている。小川・浅井（1935: 21）にタコナン集落では語末 *l* が *n* になりやすいとの指摘があるように，この語では語末の *l* が *n* に変わっていることがわかる。

上述のように，Li（1981: 254–255）のアタヤル語ツオレ方言のデータにおいて，オーストロネシア祖語の語末*d は *ʔ* で現れることもあれば，*t* または *ts* で現れることもある。何れにしても *l* で現れない。しかし，アタヤル語ツオレ方言の *hugal*「下り」でも，語末子音が期待される分節音 *ʔ*，*t*，*ts* ではなく *l* である。ツオレ方言はこの語において語末の*d が突発的に *l* になる変化をスコレック方言と共有しているため，この形式はアタヤル祖語にまで遡ると推察される。表 2 に，オーストロネシア祖語*lahud を反映するアタヤル語の二方言の形式を示し，それらの形式のアタヤル祖語を再建する。化石接辞の付加された形式は，一旦*rahu<ga>d という三音節語になったと考えられるが，前次末音節の *ra* が脱落し二音節語になったのだろう。

[8] 但し，変化の順序はこの限りではない。

表 2　アタヤル語における「下り」

アタヤル語スコレック方言	*yahuʔ*	*hu<ga>l*
アタヤル語ツオレ方言	*yahu*	*hu<ga>l*
アタヤル祖語	*yahud	*hu<ga>l

3　アタヤル語の「上り」

表 3 にあるように，アタヤル語スコレック方言の語彙集（小川 1931: 87）には「上流」を表す表現が二種類見られる。太字で示した語 *raya* と *yatux* は「上り」を示している[9]。二種類の形式のうち，*raya* は小川（1932: 4–5）や Tsuchida（1975: 240）においてオーストロネシア諸語から同源形式が挙げられており，Blust and Trussel（2010）ではオーストロネシア祖語に*daya と再建している。Li（1981: 253）は，オーストロネシア祖語の*d はアタヤル語群祖語の*d を経て，アタヤル語ではさらに *r* に変化すると言っている。

表 3　アタヤル語スコレック方言における二種類の上流

raya *na ləliuŋ*	***yatux*** *na ləliuŋ*

もうひとつの *yatux* に関して，*daya に対し*-tux* という接尾辞が付加して形成された可能性を考えてみる。小川・浅井（1935: 25）は，アタヤル語には不可解な接尾辞が見られるとし，*-niq*（例 *pu-niq*「火」← オーストロネシア祖語*Sapuy「火」），*-gal*（例 *ima-gal*「五」← オーストロネシア祖語*lima「手」），*-huy*（*baihuy*「風」← オーストロネシア祖語*bali「風」）などの例を挙げている[10]。

アタヤル語スコレック方言の *yatux*「上り」に化石接尾辞が付加しているとすると，変化の流れは以下のように推測される：*daya* → *daya-tux*（接尾辞*-tux* の付加） → *dəya-tux*（前次末音節の弱化） → *rəyatux* → *ya-tux*（前次末音節の脱落）[11]。前次末音

[9] 執筆者のフィールド調査によるとアタヤル語スコレック方言には以下の音素がある：母音 /a e i o u ə/，子音 /p β t k ɣ q ʔ s x h ʐ r l m n ŋ y w/. 子音のうち β と ɣ は表記上 *b* と *g* を用いる。Huang（1995:16–17）によれば，曖昧母音/ə/が存在しないことを除けばアタヤル語ツオレ方言も同様の音素を持つ。本稿におけるアタヤル語の語彙は基本的に音素表記を用いる。先行文献における表記は，本稿の表記法に合うように修正を加えている。

[10] これらの例に対応するオーストロネシア祖語の形式は，Blust and Trussel（2010）を参照し，執筆者が付け加えた。

[11] 但し，変化の順序はこの限りではない。

節の脱落はセデック祖語の*hu<na>t「下り」や，アタヤル祖語の*hu<ga>l「下り」にも想定された。アタヤル語群において語根は典型的に二音節であるため，化石接辞の付加により三音節になった語を再度二音節に戻す方向に変化させたのかもしれない。ただ，上述の *ima-gal*「五」や *bai-huy*「風」のように化石接辞の付いた語でも前次末音節が脱落しないこともある。ただし，*imagal* の前次末音節が脱落した *magal* という形式も Egerod（1980: 357）に見られるため，二音節語を作りたがる傾向は見て取れるだろう。

アタヤル語スコレック方言にはオーストロネシア祖語*daya を反映する形式の *raya* と，接尾辞の付加により派生された形式の *ya-tux* の二つがあることを述べた。アタヤル語ツオレ方言については，パルガワン下位方言において *rayaʔ*（原住民族委員会 2013）という同源語が見られた[12]。小川・浅井（1935: 付録 16）ではツオレ方言タコナン集落の *yatux* が「南」の意味を表す形式として挙げられていた[13]。本来は，「上り」の方向を意味する語だが，ここではこの意味が方位の「南」に置き換えられていると考えられる。この集落では南の方角の標高が高かったことがわかる。因みに，同集落の「北」には「下り」を表す語が用いられる（2 節参照）。表 4 では，オーストロネシア祖語*daya を反映するアタヤル語の二方言の形式を示し，それらの形式のアタヤル祖語を再建する。

表 4　アタヤル語における「上り」

アタヤル語スコレック方言	*raya*	*ya-tux*
アタヤル語ツオレ方言	*rayaʔ*	*ya-tux*
アタヤル祖語	*raya	*ya-tux

ここまで議論してきたアタヤル語群の「上り」と「下り」において，それぞれを表す語根から化石接辞の付加により別の形式が作られ、本来の語根と派生された形式が併存している。1 節で述べたように，セデック語には *tugu-rahuts* と *tugu-hu<na>ts* という，同一語根から作られた二つの形式が併存する。また，表 1 と表 3 に見られるように，アタヤル語の「下り」と「上り」にも同一語根から作られた二つの形式が併存する。これら併存する語同士は意味が同じである。

しかし，併存する語同士の意味が異なる場合もある。例えば，上述のオーストロネ

[12] ただしパルガワン集落はセデック族の集落と隣接しているため，この形式はセデック語の *daya* から借用され，後に語頭子音が *r* に変わった可能性もある。語末の声門閉鎖音は音素的なものではなく，音声的な現れを表記したと考えられる。

[13] 小川・浅井（1935: 付録 16）における表記は *jatoh* であるが，*yatux* と同一の語であると判断した。

シア祖語*Sapuy「火」はアタヤル語群において，祖形をそのまま反映した形式の *hapuy*（アタヤル語・セデック語同形[14]）と化石接尾辞の付いた形式 *pu-niq*（アタヤル語・セデック語同形[15]）がある。祖語をそのまま反映した形式の意味は本来の「火」ではなく，「（火を用いて）調理する」に変わっている[16]。化石接尾辞の付いた形式の方が「火」の意味を保有している。

その一方で，併存する語のうち，本来の語根の方が失われた場合もある。例えば，アタヤル語の *bai-huy*「風」（セデック語パラン方言における同源語は *bugi-hun*）のように[17]，本来の語根が失われてしまい[18]，もっぱら化石接辞の付いた形式だけが使われる[19]。

4　おわりに

表 5 では，1 節で導入したセデック語の「下り」，2 節で議論したアタヤル語の「下り」，3 節で議論したアタヤル語の「上り」についてまとめ，アタヤル語群祖語を再建した。セデック祖語の「上り」のデータも加えている[20]。いずれの形式もオーストロネシア祖語の「山手」*daya と「海手」*lahud を反映したものである。それぞれの反映形について，太字で示したものは化石接辞が付加されたと考えられる形式である。

この表から見て取れることを以下に述べる。「下り」の形式のうち，アタヤル祖語，セデック祖語において化石後方接中辞が付いた形式を比べると，それらの接中辞の形式が異なる。アタヤル祖語では*<*ga*>，セデック祖語では*<*na*>である。このうちアタヤル祖語の方は，オーストロネシア祖語*lahud の語末*d が突発的に *l* に変わる変化

[14] アタヤル語スコレック方言については Egerod（1980: 148）を，セデック語トゥルク方言については Rakaw 他編（2006: 279–280）を参照した。厳密に言えば，期待される反映形は *sapuy* であるが，語頭子音は *h* に変わっている。

[15] アタヤル語スコレック方言については Egerod（1980: 492）を参照した。

[16] ただし，セデック語パラン方言には *hapuy* という形式は見られない。Ochiai（2016: 309–310）によると，この形式に対し，化石後方接中辞<*ra*>の付いた形式である *pure*「調理する」が用いられる（← *hupure* ← *hapu*<*ra*>*y* ← *hapuy*）。現代でも交替形として *hupure* が見られる。これは前次末音節のオンセット *h* を保存している形式だが，*pure* はそこから前次末音節が脱落した形式である。ここにも二音節を作りたがる傾向が見て取れる。

[17] これらの語から再建されるアタヤル語群祖語における化石接尾辞は*-hur である。

[18] 本来の語根をアタヤル語群祖語に再建しようとすると*bari「風」となるはずである。

[19] 化石接辞の付加は一種の言葉遊びかもしれないし，その語が何らかの理由で禁忌となった場合，その語を言うのを避けるために形式を多少変えてそれとはわからなくする機能があったのかもしれない。

[20] セデック語の「上り」はパラン方言で *daya* であり，Rakaw 他編（2006: 198）におけるトゥルク方言も *daya* であることから，セデック祖語として*daya が再建される。

[21] Li（1981: 286）においてすでにアタヤル語群祖語*daya が再建されている。但し，Li はアタヤル祖語とセデック祖語のそれぞれの形式は再建していない。

表 5　アタヤル語群における「上り」「下り」の再建

	上り		下り	
オーストロネシア祖語	*daya[21]		*lahud	
アタヤル祖語	*raya	***ya-tux**	*yahud	***hu<ga>l**
セデック祖語	*daya		*rahut	***hu<na>t**
アタヤル語群祖語	*daya		*rahud	

が起きたが，この突発的変化がセデック祖語では共有されておらず，期待される反映形である*t で現れる。

「上り」の形式は，アタヤル語では，オーストロネシア祖語をそのまま反映した形式と化石接尾辞の付いた形式の二種類が見られるのに対し，セデック語は祖語をそのまま反映した形式しか持たない。化石接辞が付加した全ての形式（アタヤル祖語*ya-tux，アタヤル祖語*hu<ga>l，セデック祖語*hu<na>t）において，化石接辞が付加すると三音節語になるが，第一音節（本来の語根の第一音節）が脱落し，二音節語を形成している。

アタヤル祖語，セデック祖語の形式の比較から再建されうるアタヤル語群祖語の形式は，オーストロネシア祖語のそれとほぼ同一の形式になることがわかった。唯一の違いは，オーストロネシア祖語の*l がアタヤル語群祖語で*r に変わっていることである。化石接辞の付加を想定し，アタヤル語群祖語を再建することで，一見他のオーストロネシア諸語には見られない特異な形式と思われるセデック語の *hunat/hunats*「下り」，アタヤル語の *hugal*「下り」，アタヤル語の *yatux*「上り」をオーストロネシア祖語と関連づけることができた。

余談になるが，落合（2016b）では，台湾を北から南にかけて貫く中央山脈を境に，東側と西側に住むセデック族では，セデック祖語*daya と*hu<na>t の指す方角が逆転することを指摘している。中央山脈の西側では*daya は東側，つまり中央山脈に向かう高い方を指し，*rahut/*hunat は西側，つまり中央山脈から遠ざかる低い方を指す。中央山脈の東側では逆転し，*daya で表される高い方向は西，*hu<na>t で表される低い方向は東になる。方角の基軸となっているのは土地の高低であると述べている。

これと似た現象が，2 節・3 節でのアタヤル語ツオレ方言のタコナン集落の「北」と「南」の表現にも見られた。この集落では「北」が*hu<ga>l，つまり低い方，「南」が*ya-tux，つまり高い方である。これらの表現から，北側の標高が低く南側が高いという，この集落の地理的状況が読み取れるのも興味深い。

参考文献

Asai, Erin（1953）　*The Sedik language of Formosa*. Kanazawa: Cercle Linguistique de Kanazawa.

Blust, Robert and Stephen Trussel（2010）　*Austronesian comparative dictionary, web edition*. http://www.trussel2.com/ACD/［2020 年 4 月アクセス］.

Egerod, Søren（1980）　*Atayal-English dictionary*. London: Curzon.

Ferrell, Raleigh（1969）　*Taiwan aboriginal groups: problems in cultural and linguistic classification*. Taipei: Institute of Ethnology, Academia Sinica.

原住民族委員会（2013）　『原住民族語 E 楽園』http://web.klokah.tw［2020 年 6 月アクセス］.

Huang, Lillian M.（1995）　*A study of Mayrinax syntax*. Taipei: Crane.

黄美金（2000）　『泰雅語参考語法』台北: 遠流.

Li, Paul Jen-kuei（1981）　Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 52（2）: 235–301.

Li, Paul Jen-kuei（1985）　The position of Atayal in the Austronesian family. In: Andrew Pawley and Lois Carrington（eds.）*Austronesian linguistics at the 15th pacific science congress*, 257–280. Canberra: Pacific Linguistics.

落合いずみ（2016a）　「セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究」博士論文，京都大学.

落合いずみ（2016b）　「傾斜を軸とするセデック語パラン方言の民俗方位」『神戸市外国語大学外国学研究』92: 25–47.

Ochiai, Izumi（2016）　Bu-hwan vocabulary recorded in 1874: Comparison with Seediq dialects. *Asian and African Languages and Linguistics* 10: 287–324.

Ochiai, Izumi（2018a）　Inconspicuous infixation in Seediq, paper presented at The 28th annual meeting of the Southeast Asian Linguistic Society, Wenzao Ursuline University, May 19, 2018.

Ochiai, Izumi（2018b）　Ryuzo Torii's Paran Seediq Glossary（1900）: Annotation and observation. *UST Working Papers in Linguistics* 10: 113–143.

小川尚義（1931）　『アタヤル語集』台北: 台湾総督府.

小川尚義（1932）　「土俗に関する蕃語の数例」『南方土俗』1（4）: 1–6.

小川尚義・浅井恵倫（1935）　『原語による台湾高砂族伝説集』台北: 台北帝国大学言語学研究室.

Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang

（編）（2006）『太魯閣族語簡易字典』秀林郷: 秀林郷公所.
帝国学士院（編）（1941）『高砂族慣習法語彙』東京: ヘラルド社.
月田尚美（2009）「セデック語（台湾）の文法」博士論文，東京大学.
Tsuchida, Shigeru（1975） Reconstruction of Proto-Tsouic phonology. Doctoral dissertation, Yale University.

The origins of “up” and “down” in Atayalic languages

Izumi OCHIAI

Abstract

Two different words, *hunats* and *rahuts*, are used for the meaning of “down” in the Paran dialect of Seediq (Atayalic, Austronesian), which are reconstructed respectively as *hunat and *rahut in Proto-Seediq. The second form, *rahut, is a reflex of *lahud, the Proto-Austronesian form for “seaward.” For the other word, this paper proposes that it derives from this reflex, *rahut, through the addition of a fossilized infix <*na*> that is inserted before a final consonant. The historical changes would be as follows: *rahud (Proto-Atayalic form) → *rahu<na>t → *hu<na>t. Atayalic languages, including Atayal and Seediq, are characterized by such special infixes and suffixes of unknown function, which this paper refers to as fossilized affixes. As for infixes, those inserted before a word-final consonant and possessing the syllable structure of CV, just as <*na*> above, are referred to as “fossilized back infixes.” Similar changes might also have happened in Atayal. Two different words, *hugal* and *yahuʔ*, are used for the meaning of “down” in Atayal. The second form, *yahuʔ* is a reflex of the Proto-Austronesian *lahud. For the other word, this paper proposes that it derives from this reflex through the addition of a fossilized back infix <*ga*>, i.e., *rahud → *rahu<ga>d → *hu<ga>l*. For a word with the opposite meaning, “up,” Atayal has two forms: *yatux* and *raya*. The second form is a reflex of the Proto-Austronesian *daya “landward.” This paper proposes that the other form derives from this reflex by the addition of a fossilized suffix, *-tux*, i.e., *raya → *raya-tux → *ya-tux*.

Key words: fossilized affix, Atayal, Seediq, *daya, *lahud

受領日　2020年4月12日
受理日　2020年6月13日